

北海道

くっ ちゃ ん ちょう

# 倶知安町

## 国際リゾート都市 「くっちゃん」を目指して



倶知安町企画振興課

### 倶知安町の概要

倶知安町は、人口二万六〇〇〇人ほどの農業と観光を基幹産業としたまちで、南に「蝦夷富士」と呼ばれる羊蹄山、西に「東洋のサンモリッツ」と称されるニセコアンヌプリを主峰とするニセコ山系に囲まれ、中央には「清流日本」となった尻別川が流れる、小盆地に位置しています。農業は、耕地全体の約八割が畑作で、特産の馬鈴薯は、道内有数の生食用「男爵」の産地でありま  
す。また、観光産業は、冬をメインとして道内最大級のニセコグラン・ヒラフスキー場を核としたウインタースポーツ、また夏は尻別川でのラフティングに代表されるアウトドアが盛んで、年間一五〇万人が訪れます。



↑多くの外国人でにぎわうスキー場地区

### 姉妹都市・友好都市交流

当町の姉妹都市・友好都市交流は、姉妹都市スイス・グラウビュンデン州サンモリッツ市との行政間の相互公式訪問や青少年相互交流（短期留学）、スキーインストラクター交流などを行っているほか、町内民間団体



↑2006年にサンモリッツ市長が、町内小学校を訪問した際、けん玉・こまなどを体験した

「ペルー共和国と交流する倶知安の会」が、イモの原産国、ペルー・ラウニオン校との交流を行い、学生を中心とした短期留学を行っています。さらには、近年オーストラリアからの観光客の急増に伴い、駐日オーストラリア大使との交流も積極的に行っています。

### 1. スイス・グラウビュンデン州サンモリッツ市

美しい湖や森、アルプスに囲まれたサンモリッツは、爽やかな高地気候と晴天に恵まれた世界屈指のリゾート地。人口約六〇〇〇人のまちで、基幹産業を観光とし、夏のアウトドアスポーツ、冬のスキーなど当町と類似している点があるまちです。

サンモリッツ市とは一九六四年、当時高橋清吉倶知安町長が、オーストリア・インスブルック冬季五輪に視察で訪れた際、当時のサンモリッツ市長と会見し、姉妹都市提携の合意を得ることができました。日本とスイス両国間の姉妹都市提携は、国内第一

号。これを機に相互交流が始まりました。

近年では、二〇〇六年にサンモリッツ行政局から、バルト市長含め五人の訪問団が来町し、



↑2007年に町内在住高校生3人がサンモリッツへ短期留学

日本舞踊など日本文化を堪能したほか、町内民間団体との交流、さらには小学生とけん玉、こまなど、昔ならではの遊びを体験しました。また翌年の二〇〇七年には、町内在住の高校生二人がサンモリッツへ短期留学し、現地の学校へ体験入学したほか、地域ならではの風習や文化を体験しました。今年も、サンモリッツから留学生二人が来町するなど、来年四五周年を迎える姉妹都市交流は今なお盛んに交流を続けています。

## 国際リゾート都市「くつちゃん」を目指して

近年、当町を訪れる外国人観光客が急増し、二〇〇一年度から二〇〇七年度にかけて、宿泊者数は約六〇倍、宿泊延数では約五〇倍に増加しています。中でもオーストラリアからの観光客が約七割を占め、近年ではアジアからの観光客も急増しています。

### 1. なぜ、ニセコひらふ地域に？

なぜ、外国人観光客はニセコひらふ地域を訪れるのでしょうか。彼らは、優れた雪

質（パウダースノー）、豊富な雪量、北米、ヨーロッパより近距離で、渡航費も安価、時差がないなど、このようなメリットがあることを求めてやってくる。これは、在住オーストラリア人の口コミ、オーストラリアメディアの報道などが大きな要因となり、来訪しています。

### 2. 来訪した観光客の特性と傾向

旅行目的は主にスキーで、特にオーストラリア人の平均泊数は七・五日と他国と比べ長期滞在が特徴です。また、これらの相乗効果と予測できる結果として、アジア・ヨーロッパ・北米など世界核国から観光客が訪れています。



↑ニセコグランヒラフスキー場の全景

### 3. 外国資本の参入

外国人観光客の急増に伴い、外国資本の参入が相次いでいます。外国人関連法人は、現在四〇数法人が設立されています。また、不動産（土地、建物（旧ペンション））の売買や、コンドミニアムと呼ばれるアパート式別荘の建設が著しく、高層の建物が顕著に見受けられるようになりました。

### 4. 多文化共生

外国人観光客のリピーターは、現地でのおコミなどで広まり、また外国資本の参入

により外国人の雇用が確保されたため、観光から移住へとシフトしています。外国人観光客が最も多い冬期間で、今年二月には外国人登録者数が四三二人と、初の四〇〇人代にまで伸びています。住居もひらふ地区（スキー場地区）のみならず、市街地まで及んでおり、市街地区でも外国と思维せるくらい、全町的に増加しています。

まちはひらふ地区にブロードバンド環境を整備。また行政のみならず、観光協会など民間団体では、日英表記のパンフレットを発行しています。中でも昨年当町では、日英表記で転入してきた際の各種手続きや日常生活に必要な情報を掲載した「生活ガイドブック」を発行しました。移住者のみならず観光客も対象とし、観光協会では日本文化に触れてもらおうと「文化体験ツアー」を実施し、さらにひらふ地区では、治安などの悪化を事前に防ごうと、警察や各民間団体、地域が共同で「防犯パトロール隊（民間交番）」を設置しました。市街地でも外国人対応インフォメーションセンターの開設や、羊蹄山麓の医療の中核を担う倶知安厚生病院では、冬期間通訳スタッフを配置し、庁舎内には今年四月から国際観光推進員を配置するなど、まちを挙げて取り組みなければならぬ課題は山積みです。

これらを踏まえ、まちや各種民間団体、地域が一丸となって「国際リゾート都市」を目指し、地域が同じ目標に向かって取り組んでいきます。

岐阜県

## かにし 可児市



外国人が参画するまちへ  
～多文化共生センター「フレビア」を拠点に～

企画部まちづくり推進課

### 第二の多文化共生時代

名古屋から北東に直線で三〇km。名勝百選「日本ライン」で有名な清流木曾川のほとりに、人口一〇万三〇〇〇人の岐阜県可児市はあります。



↑木曾川舟遊び

可児市は昭和四〇年代後半から、名古屋などのベッドタウンとして大型住宅団地の造成が進み発展してきました。人口は急増し、一九七二年に二万九〇〇〇人だったのが、一〇年後の市制施行時は倍の六万二〇〇〇人に膨れ上がりました。

当時よく言われたことが「新旧住民の融和」です。もともと農村を基盤とした旧来の人と、都会からの新しい人の生活文化の違いを埋める言葉であったのですが、今流に言えば日本の中の多文化共生であったのかと思います。その点でいくと現在の外国人の流入は、本市にとって第二の多文化共生時代なのかもしれません。

### まちはブラジルカラーに

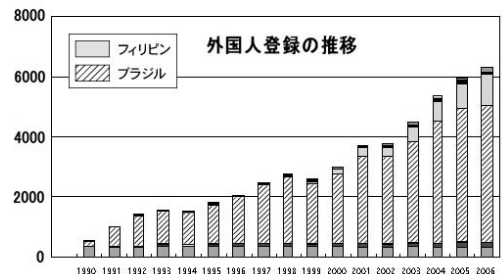
二〇〇八年六月一日現在、七三四七人。外国人登録がついに総人口の七%を超えてきました。可児市の外国人人口は、入国管理法の改正以来増加の一途で、主に日系ブラジル人を中心に増えてきました。近年は、フィリピン人の増加も著しく、七割がブラジル、二割がフィリピン、そのほかが一割と

いう状況です。

その多くは派遣会社から派遣された二〇～四〇代で、この地域で盛んな製造業の工場生産ラインに貴重な労働力として従事しています。居住区域は、木曾川沿いに集中し、その地域では外国人人口が二〇%を超えています。

このように多くなると、まちには外国人に向けたレストランや中古車販売、スーパーやコンビニ、理髪店などが立ち並び、至る所で黄色と緑のブラジルカラーの看板や服装を見かけるようになりました。

そして、日本での生活が長くなり安定してくると、家族を本国から呼び寄せ、永住権を取得して手狭なアパートから郊外の新興住宅地など二戸建てを購入する人も多くなってきました。



↑ブラジルカラーの店が立ち並ぶ



↑ばら教室KANIの日本語適応指導



## 国際化施策大綱による 外国人支援

定住化は、隣人として日本人と一緒に地域の中で生活していくことであり、問題もいわゆるデカセギと言われる短期的在在のゴミや騒音に加えて、教育、交通、医療、防災、治安など生活全般に及んできました。

そこで本市は、外国人が三〇〇〇人を超えた二〇〇〇年に、今の多文化共生推進プランとも言える「可児市国際化推進大綱」を総合計画の部門計画として位置付けました。

このプランは、①お互いを知り理解すること②安心して心豊かに暮らすこと③交流の機会を広げること④国際化を推進する体制を整備することの四つの方針のもとに、外に向けていた国際交流の概念を内なる国際化（多文化共生）にシフトし、具体的な施策を進めていくというものです。

## 国際交流協会と 二人三脚で

この時期に民間で可児市国際交流協会が立ち上がりました。そして外国人を支える最前線として同協会と市は、二人三脚でこの大綱に沿って事業を展開してきました。

まず、大綱の方針①お互いを知り理解することに关しては特に調査を実施しました。

二〇〇三年から実施した訪問調査「外国人の子どもの教育環境に関する調査」では、七％に近い不就学の実態とともに登録と居

住実態の違いが分かってきました。その後、初期日本語適応教室「ばら教室KANAI」を立ち上げ、編入の児童生徒に一定期間日本語と生活習慣を指導し、各在籍校へ戻すシステムを作りました。このことが学習意欲を高め、ドロップアウトによる不就学を防ぎ、その後の学校生活で大きな効果を与えています。

また二〇〇六年には、外国人全世帯に向けて郵送で「多文化共生に関するアンケート」を実施しました。この調査では、日本語が分からないこと、健康・医療をはじめ悩みが生活全般で多岐にわたることがはっきりしてきました。

こうした実態やニーズを踏まえ、可児市は、今年四月に可児市多文化共生センター「フレビア」を新設開館しました。

ここは、主に外国人の自立を支援するため①情報の提供②日本語学習支援③外国人相談④交流の場の提供という四つの機能を柱に運営を行い、多文化共生を進めるための拠点施設という使命を担っています。

## 外国人の力をまちづくりに

先のアンケートに同封し、外国籍市民会議の参加者募集のチラシを配布しました。これにブラジル、フィリピン、中国から七人が手を上げてくれました。

その後彼らがリーダーとなり、外国人がまちづくりに参加できるような取組みを始めました。ゴミの分別の必要性を知るため

終末処理場へ見学ツアーを組んだり、可児川の一斉清掃で日本人と一緒にゴミを拾ったりすることで、外国人自らが地域への関心を持つようになってきました。

また、フレビアでは「外国人による外国人のための生活講習会」を開催しています。定期的に日系ブラジル人グループが中心になって、後輩に日本や可児市の制度、習慣をポルトガル語で伝授しています。

また、フィリピンの県人会と言え組織も定期的にフレビアで活動するほか、東海地区のフィリピンの二チームによるバスケットリーグも市内で開催されています。

今後の可児市を展望する上で、若く活気のある外国人の存在は、必要不可欠と言えます。可児市は、こうした外国人のコミュニティの活動を応援するとともに日本社会との接点を多く持つてもらう中で、彼らが彼らだけの世界で生活するのではなく、彼らと日本人が共に認め合いながら、新しいまちの構築のために参画してもらうことを積極的に進めていくよう考えています。



↑可児市多文化共生センター「フレビア」



↑可児川一斉清掃に参加する外国人